

釣れ釣れなるままに

2011年思い出の釣行記 PART. 3

# 酔うほどに

**鹿島釣狂**



本日の釣果

忘却とは忘れ去ること

### 岩見沢釣遊会第3回大会

☆開催日	平成23年6月	5日
☆開催場所	笛舞港～岬港	
☆入釣場所	東歌別	
☆釣果	アブラコ	416 mm 4
	カジカ	313 mm 1
	重量	420 0 g
☆成績	合計点数	1149 点
	成績	3 位

釣遊会が主催する交縁会との合同大会である。事務局長となった今は何かと気ぜわしい。バス会社に当日の運行を確認したり、審査・昼食会場の手配をしたりする。大会参加者の確認をするが何とか都合をつけて参加できるようになったとのうれしい連絡が入る一方、急用が出来てどうしても行けなくなったとの残念な連絡も入る。万が一の海難事故等に備えて名前を添えて保険に加入しておく。

賞品の準備には特に気を使った。個人戦は総合優勝から5位、身長優勝と決まっているので簡単なのだが団体戦は人数によって景品の配分が変わってくる。予算はある程度決まっているのでその金額に合わせた購入が必要となるのだ。今回、米穀店等を幅広く経営している会長にお米を提供していただいたので、重量優勝と、身長優勝は豪華な副賞となった。医釣会の中江氏から差し入れられた品は飛び賞として利用させていただく。他にも審査用具、総会の折に会員の皆さんから頂いていた酒と紙コップ、参加者に巻いてもらう腕章、審査提出魚用ビニル袋、帰路にバスの前面に貼り付ける大会旗も忘れてはいけない。前回はバスの中で飲んでいただく酒を忘れてしまって、急遽、自宅の玄関前に出してあった酒を取りに戻ったのだ。今回も案の定、大会旗を運転手に渡すのを忘れてしまった。運転手が何とかバスの中の私の荷物から捜し出してくれてバスの前面に貼られてあったのを見たときは、ほっと胸を撫ぜ下ろした。何とか忘れ去っていないことがせめてもの慰みか・・・。

### 酔うほどに

とにもかくにも自分の釣り道具と会の荷物を車に満杯に積み込んで集合場所に到着した。出発後、大会の進行役をこなしながら酒のコップを参加者に渡す。釣り好きは飲兵衛が多い。釣り場に着くころには3本の1升瓶が空になって座席シートに転がっていた。遠足気分なのである。それぞれが持ち込んだつまみを肴に釣り談義に花を咲かせる。話題が過去に釣り上げた大物の話に及ぶと眉に唾をつけなければ聞いておられない。酒の量が増すに比例して手と手の間隔が広がっていくのは恒例のことだ。大会で釣り上げてきた魚のことならウンウンと背いておれるのだが、釣り損なった魚のことを手振り身振りを加えて臨場

感溢れるように話し出すようになると、ただただオツタマゲルしかない。今回は山女魚など溪流釣りにまで話が広がったものだから際限がない。真実はいかかなものかと思っていると、くしくも西川氏が厳寒期の山女魚釣りの釣果を携帯電話の画像で開陳した。鯖の取れていないものも含めて30匹ほどが雪の上に燦然と並べられていたのだ。

人はなぜ酒を飲むのだろうか。酒を飲むことを許されるのは「嬉しい時」「悲しい時」に限られるそうだ。私には無限にあるように思われる。私は、毎日晚酌をするが、これといった特別な理由で飲んでいるわけではない。疲れを癒すといってしまえば一番分かりやすいのかもしれない。特に仕事で疲れた時のはじめの一口がとろけるようで美味い。疲れた頭がホワンとする気分がよい。

今回も、私はクーラーに缶ビールと保冷剤を入れてバスの中に持ち込んだ。釣り場から汗ダクダク、喉カラカラにして乗り込んだバスの中で飲むビールがこれまた格別なのだ。そして、帰りにはクーラーの中のビールに代わって大量の獲物を入れてくる算段だ。しかし、その想いとは裏腹に空のままのクーラーを持ち帰ることも多い。発泡スチロールの魚箱に氷水を入れてくる兵もいる。その中に入れた冷え冷えの冷酒を楽しもうというわけだ。

酒好きが集う仲間だからカジカの時期には現地でカジカ汁などの企画もいいかなと思う。暑い最中は海水浴を兼ねて炭火焼きパーティでも催そうか。素潜りが得意の輩もいるから炭火を囲んで獲った獲物などを味わうというのはどうだろう。

酒を題材にした唄がたくさんあるが、どうも悲しい酒が多いようである。美空ひばりが「一人酒場で飲む酒は、別れ涙の味がする」と歌った。タイトルは『悲しい酒』である。現在は天国で『川の流れのように』穏やかな心持ちで知己と酒を酌み交わしているのだろう。八代亜紀が『舟歌』で「お酒はぬるめの爛がいい 肴はあぶったイカがいい」に続けて「涙がポロリとこぼれたら」「心がすすり泣いている」と歌った。細川たかしは『北酒場』で「夢追い人はグラスの酒と思い出を飲みほして」「北の酒場通りには涙もろい男が似合う」と歌い、世良公則が『あなたのバラード』で「酔いどれ男と泣き虫女 しらけた笑いに厚化粧ひとつ」と歌った。

只、私の60年余りにもなろうとする経験から、決して乱れてはいけないと思う。

「酒は量（はか）なく乱に及ばず」（論語） あの孔子も酒は強かったようだ。

「酒、知己と飲めば千鐘も少なし、話、機に投ぜざれば半句も多し」 親しい仲間と酒を飲むと、千鐘の酒があっても足りなく感じるものだ。しかし、機転の利かない話を聞いていると非常に長く感じる。気のあったもの同士で愉快的な酒を飲みたいものだ。

「蛇は水を飲んで毒を作り、牛は水を飲んで乳を作る。患者は酒を飲んで狂水とし、智者は酒を飲んで智水となす」と仏典にあるらしいが、自分はいずれにあたるか。酔っぱらいとは、自分が最高に徳のある人間と勘違いして他人に説教するような人間のことである。他人からは最低の人間だと思われているのにそれに気がつかない。自戒したいものである。

釣り好きは山歩きも好きらしい。フキやウド、ギョウジャニンニク、ワラビ、タケノコそして秋のマイタケなどのキノコ採りまで話が発展し魚の大きさと混じりあっていく。今

回は堀内氏が出してくれたフキの煮付けが絶品で、酒を入れるはずの紙コップに山盛り2杯分を取り分けて頂いた。ご丁寧に割り箸まで付いている。次回は7月初旬の大会なので、タケノコでもご相伴になりましょうか。

## 十八番の東歌別

エリモの大会では、もうそろそろ東歌別を卒業したいと思っている。堀内氏にくっ付いて日勝大和にでも行ってみようか？ それとも西川氏にくっ付いて坂岸に向かおうか？ 大前氏が入る菊水も魅力がありそうだ。歌露からは前野氏がいつも大物をゲットしてきている。西東洋も嵐氏や吉井氏が大物を抱えて持ってきているところだ。しかし、彼らが最も得意とする場所には彼らが入るだろうし・・・

今回は潮が8cmと低いのだが最干潮が11時半で10時締め切りの釣遊会では出岬に乗ってられる時間が1時間程度である。午前4時の満潮時間帯を頂点とする潮待ち状態で釣り場を物色しなければならない。それはその場の経験があり溝等を熟知していないと厳しいと思われるので、やはり現場経験の豊富な東歌別しかなさそうだ。

笛舞漁港で身支度を整えてから予定通り日勝大和に堀内氏を先頭に3名が下りていった。エリモ港を過ぎたシャクナゲ公園あたりで突如、前野、嵐氏が下ろせと言う。新浜界限での何か特別な情報が入ったのだろう。菊水に吉井氏が向かった。吉井氏のいつもの場所とは違うのは、潮待ち時間の過ごし方を思案したらしい。

私はいつものように東歌別で岩本、吉本、小野田氏と一緒に下りた。岩本氏は昨年、阿部氏が52.5cmのカジカを釣り上げた溝に、吉本氏もその隣の溝に入った。小野田氏があふれてきたので、私の隣の溝を紹介した。正直言うと私の上を行ってもらっては困るが何とか無事大物を釣り上げて欲しい。無事4名がこの界限の溝に収まった。

竿入れ間もなく25cmほどのハゴトコに続いてカジカも来た。これも25cm程しかないが、大事な嫁候補である。ゴロとコマセをつけて近間にドボン、ドボンとやるが魚がいないうだ。それではと2本バリを30号鉛で遠投するが、ホンダワラが繁っているのか竿が落ち着かない。40号鉛に替えてみるとホンダワラの下に落ちたのか竿が安定してきて、40cmを頭にアブラコがポツン、ポツンと釣れた。

ゴン、ゴン、ゴンとカジカ独特のアタリで竿尻が持ち上がった。大物だ。リールがキリキリと軋み、カジカ特有の重たさでジワーッとよってくる。防潮堤の際に道糸が垂れ下がり、そーっと覗いてみるとアングリと口をあけたカジカの大物が睨んでいる。舟揚場から回り込んで取り込むかどうか迷ったが、満潮時で防潮堤に波が打ち付けており、チト難しそうである。仕方なく、防潮堤の上にしゃがみこんで、道糸を手で手繰り寄せることにした。海面からカジカの尻尾が浮いた。そして1m程をそろりと引き上げたカジカが大きな体を揺すった途端に、ポツンと落ちてしまった。切れたのは仕掛け糸でもハリスでもなくPE2号の道糸だった。

前回の日本海の大会の折、弁慶岬の岩場で道糸が擦れていたのだ。道糸を点検してぼろ



ぼろになったところを切り捨てたのだが、まだその上に傷があったらしい。ナイロン糸なら傷がわかりやすいのだがPEラインとなると・・・。とほほほほ。

菊水方面に向かって歩いてみるが、全ての舟揚場や溝には釣り人が入っているので移動することも出来ない。ここで粘るしかない。北の釣り会浦河支部の支部長がやってきた。仲間がこの辺りで50cmを超えるアブラコを取り逃がしたらしい。竿道会の荻野氏もやってきたが、いつもの岩には上がらずに違う溝を狙うらしい。

明るくなってきて、少し潮が引いてきたが、いつもの十八番の岩にはまだまだ乗れそうにも無い。何度か留吉の沢方向に歩いてみて乗れそうな岩がないかを確認、7時にもう一度行ってみると何とか無事に渡れそうな岩盤が見えてきた。急いで荷物を担いで戻ってみると狙っていた岩には先客がすでに入っていたので更にその先の高岩に渡った。磯際にはビッシリと昆布がうねっている。締め切りまで後1時間ぐらいだろうか。

すぐに35cmほどのアブラコが来て、40cmほども続いた。昆布がうねる浅場のど真ん中に仕掛けが入った。昆布の上に仕掛けが乗っていると思えば投げなおそうとするとグックと大物のアタリで竿が入った。なかなかの抵抗感で50cm台の大物を予感させたが、昆布根との綱引きで抜け出てきたのは、残念ながら40cmほどのアブラコがダブルであった。その後も次から次とアタリが出てここで新たにアブラコを10本ほど釣り上げたが時間が来てしまった。そう言えば今日は仲間からの電話もなかった。みんなやっとな乗れた岩場で時間ぎりぎりまで奮闘していてその余裕がなかったらしい。

## 自重すべきは己のこと

### 審査結果

優勝	吉井 博	1495点 (アブラコ496mm+カジカ 365mm+6340g)	東 歌 別
準優勝	堀内正博	1321点 (アブラコ485mm+カジカ 346mm+4900g)	日勝大和
3位	仲俣釣狂	1149点 (アブラコ416mm+カジカ 313mm+4200g)	東 歌 別
4位	岩本 満	1107点 (アブラコ380mm+カジカ 377mm+3500g)	東 歌 別
5位	島 強二	1101点 (アブラコ392mm+カジカ 323mm+3860g)	東 歌 別
身長優勝	大前健治	1256点 (アブラコ490mm+カジカ 340mm+4260g)	菊 水

昼食会場では審査、個人賞の確定、団体戦の計算、表彰式と続く。仲間内だけなら後で訂正が可能だがお客を乗せている手前審査間違いは厳禁なのだ。会員それぞれが気を使ってくれたお陰で無事今回の大会を終了することが出来た。

審査の結果、私は何とか3位に入賞することが出来た。干潮時に岩場の先へと前進しての釣りが主となるエリモだが、今回は最干潮時が11時半ということで、苦勞した会員が多かった。大会上位者は潮が引ききらない長い時間帯を岩盤上の溝で嫁のカジカを狙った我慢の釣りをして、8時頃からようやく狙いの岩に渡って1時間ほどで大物アブラコを揃えてきたのだ。

総合優勝者の吉井氏は、留吉の沢の溝で45cm程のアブラコと嫁のカジカ4本を獲り、

干潮時に渡った東歌別の出岬では最身長となった49.6cmをはじめとするアブラコを大釣りしてきた。昨年優勝した西東洋横澗での再現を目指すかどうか悩んだあげく、今年の潮では横澗に乗ることは出来ないと判断したことが功を奏したのだ。エリモでは昨年に引き続きの2連勝である。

身長優勝は得意とする菊水で竿を出してアブラコ49.0cmを抜き上げた大前氏が獲得した。彼も暗い内からカジカを揃え、岩場に出た1投目に大物が竿尻を持ち上げたのである。大物釣り師の面目躍如である。

準優勝は堀内氏である。1、2回の大会では魚の顔を拝むことさえ出来なかった堀内氏だが、3年前に釣遊会歴代身長1位の54.5cmのアブラコの実績がある日勝大和でアブラコを大釣りしてきたのだ。前回と同じく防潮堤の上にクレーン釣りすることが出来ずに他の釣り会に助けて頂いての獲物だったらしい。一緒に下りて竿を振っていたボナさんは「俺の隣に入った奴がいつも大釣りする」と言うが、またしてもその通りの結果となったのだ。

大会翌日、堀内氏から私が酒に酔った勢いでお強請りしていたフキとワラビが届けられた。そして、またしてもフキやワラビ、そしてアブラコの煮付けを肴にして酒が進み、女房に大洞を吹く始末となった。自重すべし・・・。



魚を前に出して下さいの要求に腕を持ち上げるが、堀内氏が魚の重さに負けて魚を落としてしまった。吉井氏、大前氏は何とこらえていたのだが、堀内氏が時間を掛けているうちに「俺も」「俺もだ」と3人とも魚を落としてしまった。



砂まみれになってしまったが全て49cm台のアブラコを持つての入賞者  
左から総合準優勝：堀内氏、総合優勝：吉井氏、身長優勝：大前氏

#### 豆イカ釣り

☆釣行日 平成23年6月23日(木)  
☆入釣場所 留萌三泊港  
☆釣果 豆イカ42杯 アカハラ350mm 1

6月19日(日)釣り新聞で真ガレイ、豆イカが留萌管内で好調だと伝えている。そこで、小平大堰海岸での真ガレイ、留萌三泊港での豆イカ釣りに照準を合わせて釣り計画を立てた。カレイ釣り用仕立てはすぐにも揃うのだが、豆イカ釣り用の道具立てがなかったので、それに見合ったエギ竿、リール、エギ等を購入した。ロッドは竿先がソリッドで感度良いといわれている7フィートのライトタックル、2000番リールの道糸にはPE0.6号を巻いてもらい、その先のリーダーにはエギを沈みやすくするためシーガーエース1.0号を選んだ。

しかし、高速道路無料化の実験が6月19日をもって終了するというので、女房が名寄にいる娘夫婦を訪問したいと電話で予定を聞いている。あいにく(幸いというべきなのだろうが)娘の用事がないので歓迎してくれるということになり釣り計画を断念して名寄に向かった。ついでとってはなんだが、その復路に朱鞠内湖、苫前港を經由して留萌海岸の様子を見ながら南下した。朱鞠内湖畔の休憩所から一望すると、島の周辺に立ちこんでルアーを飛ばしている釣り人がいる。おそらく本誌に登場している臼井豊氏が足げく通いイトウをゲットしている場所だと思われる。古丹別川の溪流を眼下に望み、溪流釣りの道具を詰め込んでいなかったのが悔やまれた。釣り道具は一切持ってきていなかったのだ。

苫前を過ぎ、大榎海岸に釣り人がたくさんいた。アカハラ釣りで利用する小平薬川河口の様子を視察する。

三泊港に寄り道してみると、豆イカ釣りの釣り人によって岸壁に沿った道路に溢れんばかりの車が停めてあった。釣れているようだ。30分ばかりじっくりと釣り方を観察したが、居ても立ってもいられなくなった。次週の日曜日は大学のゼミナールの同じ学年の仲間たちで組織した同窓会が定山溪で予定されている。朝まずめに的を絞って平日の午後勤務を捜すと24日(木)は何とかなりそうだった。

丁度その日が勤務休みの息子を誘い午前1時半に自宅を出発した。途中、美唄光珠内の国道12号線でトラックがものすごい火を噴きながら炎上していた。運転手はトラックから離れて携帯で連絡を取っている。爆発しないのだろうか心配になる。二人ともそのような現場はテレビ画面でしか見た経験が無く、恐怖を感じながらもその脇をそろりと通り抜けた。まもなく対向車線にパトカーや消防車が赤色灯を回転させながらけたたましく駆けていった。

白々と明けてきた留萌三泊岸壁で釣りを開始する。平日にもかかわらずかなりの人が豆イカをねらって釣りをしている。息子には豆イカ釣りのために準備した道具一式を渡す。仕掛けにはオప్పイスメとエギを連結したアシスト仕掛けを結んだ。私はシャケ釣り用の10フィートのルアーロッドとリールには2号ナイロン糸を巻いて、その先に1.5号のエギのみを付けた。間に合わせでゴツクになったのが気に食わないが致し方ない。

私の仕掛けを準備している間にも息子が2杯釣り上げてしまった。二人とも周辺のベテラン達と大差なく釣れてくる。もう少し釣れる工夫は無いだろうかと1号磯竿におっぱいスメを3連結した「波止めイカセット」を結んで振り込んで置き竿にした。アタリは出るのだがなかなか豆イカが乗らない。こんどはそのオప్పイ針にテラー仕掛けのようにササミを巻いてみると、がっちりといかが抱きついてくる。エギはやめにして磯竿を手を持つ。





### 初豆イカ「ゲッチュ」

余裕が出てきて釣り上げた豆イカをワサビ醤油に付けて食してみると吸盤が唇や舌に絡みいて何とも言われぬ食感である。持ち込んだビールをグビッとやるがこれがまたたまらない。息子はいい加減だが私も飽きてきて、雨がぱらぱらと落ちてきたところで打ち止めとした。最後に釣り上げた豆イカを数えてみると二人で42杯だった。初の豆イカ釣りとしては上々で、また私の釣りに新たなジャンルが加わった。職場ではさすがに眠かったが、夕食を飾った豆イカの煮付けは卵巣がとろりとして絶品だった。



本日の釣果と健闘したエギ